

グループホーム在住認知症患者の 口腔状態へ環境因子が与える影響

鈴木直子¹⁾, 濱島拓也²⁾, 山屋乃里子³⁾, 渡井幸雄⁴⁾, 山本和雄¹⁾

¹⁾ 株式会社オルトメディコ, ²⁾ 医療法人社団 新聖会, ³⁾ 元住吉デンタルオフィス, ⁴⁾ 戸塚デンタルオフィス

【背景と目的】

- ◆継続的な口腔ケアは、進行が速いと言われる認知症患者の口腔機能の衰えに対し効果がある。
- ◆口腔機能の衰えが認知症の誘因であることを示唆する疫学研究



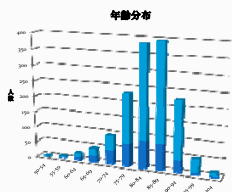
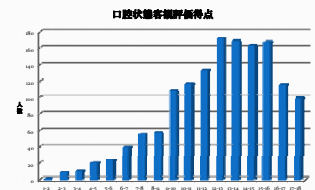
口腔機能は、認知症患者の様々な環境因子にどのような影響を受けるか？

【対象と方法】

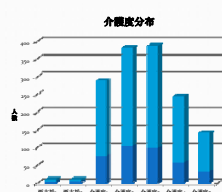
対象:東京都、埼玉県、神奈川県グループホーム80施設において、継続的な口腔ケアを受けている認知症患者1460名
評価軸:年齢、性別介護度(認知症自立度におおよそ対応)、追跡期間、残存歯数、口腔内評価得点(※)
調査期間:平成22年8月～24年4月

※口腔内評価得点: 歯科衛生士による客観評価を点数化。合計0～18点。

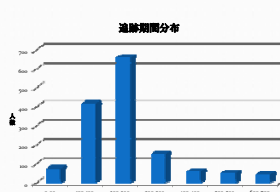
口腔		自発的な口腔清掃習慣		むせ		食事の食べこぼし		表情の豊かさ		咬合力(右)		咬合力(左)		歯や義歯の汚れ		舌の汚れ		フケブクがい	
選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点	選択肢	得点
ない	2	ある	2	ない	2	ない	2	豊富	2	強い	1	強い	1	ない	2	ない	2	できる	2
強い	1	多少ある	1	多少ある	1	多少ある	1	普通	1	弱い	0.5	弱い	0.5	ある	1	ある	1	やや不十分	1
強い	0	ない	0	ある	0	多い	0	乏しい	0	無し	0	無し	0	多い	0	多い	0	不十分	0



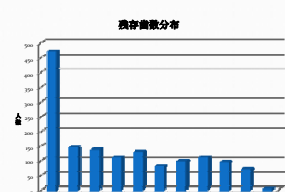
83.3±7.5歳
 男性: 80.8±8.0
 女性: 84.2±7.1
 (※平均±標準偏差、以下同)



2.7±1.3



243±126日



10.0±9.3本

分析手法: 口腔状態客観評価得点の変化量を従属変数とし、年齢・性別・介護度・追跡期間・残存歯数・評価得点の初期値を独立変数とした重回帰分析を行った。

<モデル式>

$$(\text{口腔状態客観評価得点の変化量}) = b_1 \times (\text{年齢}) + b_2 \times (\text{性別}) + b_3 \times (\text{介護度}) + b_4 \times (\text{残存歯数}) + b_5 \times (\text{追跡期間}) + b_6 \times (\text{残存歯数}) + b_7 \times (\text{客観評価得点初期値}) + (\text{定数})$$

※性別: 男性=0, 女性=1

【結果と考察】

	b_i	β_i (標準化係数)	p値
年齢	-0.026	-0.073	0.003*
性別	0.404	0.066	0.006*
介護度	-5.18	-0.251	<0.001*
追跡期間	-0.004	-0.206	<0.001*
残存歯数※初期値	-0.002	-0.007	0.772
評価得点※初期値	-0.346	-0.433	<0.001*
定数	7.768		<0.001*

$R^2=0.208$

→N.S.残存歯数はあまり影響しない

- ◆年齢が高い程、評価得点は下がりやすい
→高齢であるほど、口腔状態の維持が難しい傾向
- ◆追跡期間が長い程、評価得点が下がりやすい
→評価得点は時系列的に下がっていく傾向
- ◆男性であるほうが、評価得点が下がりやすい
→寿命の短さと関連?
- ◆評価得点の初期値が高い程、評価得点は下がりやすい
→高い評価得点を長期間維持するのは難しい傾向
- ◆介護度(≒認知症自立度)が高い程、評価得点が下がりやすい
→介護度が高い患者の口腔状態の維持は難しい傾向

【まとめ】

- ◆重回帰分析の結果は概ね理解しやすく、受け入れやすいものであった。
- ◆年齢が高い程、男性であるほうが、介護度が高い程、追跡期間が長い程、また口腔評価得点が高い程、口腔状態客観評価得点は低下しやすいことが示唆された。